

鍋 被 り 葬 考

その系譜と葬法上の意味合い

関 根 達 人

1. はじめに

中世末から近世の墓に、鉄鍋を頭に被せる葬法が存在することは、神田孝平や上田栄吉らにより明治時代から注目されるところであった(神田1887、上田1887)。鍋被り葬が早くから注目を集めた理由は、その特異性もさることながら、発掘の結果明らかにされた葬法を民俗的事例に基づいて解釈しようという点にあったと思われる。

戦後、鍋被り葬の発見例が多い八戸・二戸地方では、小井川潤次郎や草間俊一により事例の集成が行われ、当該地方に伝わる「癲病死者の葬法習俗に、鍋を被せて埋葬し、病気が子孫に継ぐのを防ぐ方法として用いた」とする伝承と関連づけた理解が広まっていく(小井川1954、草間・森本1972)。初めて全国的規模で鍋被り葬の集成をおこなった桐原健は、鍋を被せた直接的な理由は不明としながらも、鍋被り葬が信濃と東北地方に偏って発見されていること、民俗事例では鍋を被ることがタブー視される傾向にあることを指摘したうえで、この葬法が中世以前に遡る可能性があるとの見通しを示した(桐原1974)。

近年では、関東地方の発掘調査事例を中心に、桜井準也が、鍋被り葬を通して村落空間論を展開している(桜井1992、1996、2001、2002、桜井・杉田2001)。桜井の村落空間論は、墓域外から発見される鍋被り葬墓(単独鍋被り葬)に立脚し、その被葬者に「ハンセン病・梅毒などの特殊な病気を患っていた村人あるいは行き倒れ」を想定している。しかし、桜井も指摘しているように、鍋被り葬の事例中、単独埋葬例は約半数に過ぎない。逆に単独埋葬例中、鍋被り葬の割合がどのくらいで、どのように位置づけられるかについても十分検討されているとは言い難い。

2001年には『墓標研究会会報』第5号において、「鍋と墓」と題する小特集が組まれた。このなかで長佐古真也は「ハンセン病患者の社会的認知に対する歴史的反省の気運が高まるなか、当該疾病との関連が指摘されている鍋被り葬を以って、考古学の立場で新たな史料と視点を提供することが、どれほどタイムリーで重要な意味をもつかは明白である」と述べている(長佐古2001a)。であればこそ今日、鍋被り葬の問題は、安易に民俗的事例に基づく解釈に頼ることなく、発掘調査事例の詳細な検討によって、その性格を明らかにすべきと考える。

ともすればハンセン病など特殊な病気と結びつけた議論ばかりが先行しがちな鍋被り葬に関して、

寺島孝一が『俳風柳多留』より親心から愛するわが子に鍋を被せる句を引用し、鍋と特殊な病との結びつきを前提とすることに警告を発した(寺島2002)のは、極めて妥当な意見といえる。

鍋被り葬研究が注目されるなか、東北地方の鍋被り葬に関しても、最近、井上雅孝、羽柴直人により事例集成と新たな事例紹介がなされ、関東地方と様相の異なる点が存在することも明らかに成りつつある(井上2002、羽柴2002)。本論では、はじめに、東北地方の事例に基づき、鍋被り葬の実態を明らかにする。ついで、中世の頭に播鉢を被せた葬制や鉄鍋を伏せた祭祀遺構、北海道のアイヌ墓に副葬される鉄鍋を視野に入れ、考古学的事実の積み重ねに基づき、鍋被り葬の系譜と葬法上の意味合いに関して考察を試みる。

2. 研究方法

管見に拠れば、東北地方で2001年度末までに刊行された発掘調査報告書に掲載された中世末から近世にかけての墓(後述するように一部近代墓を含む)は、およそ1600基を数える。うち、本論で取り上げる鍋被り葬に関連すると思われる墓として、墓壇から鉄鍋が出土した墓34基と、播鉢を出土した墓1基の合計35基の墓を抽出した。また、これら正式な発掘調査以外に、これまでに鍋被り葬として報告された不時発見の14例を加え、合計44遺跡49例を対象とした(第1図)。なお、これらの墓の中には鍋を被葬者の頭に被せたのではなく、正位の状態で副葬した事例や不時発見のため必ずしも鍋の出土状況が明らかでないものも含まれている。本稿では、それらを全て一旦「鍋被り葬」の範疇に含め、改めて、出土状況を検討した。

検討した項目は、墓の立地と年代、遺体の埋葬姿勢および棺の種類、被葬者の性別・年齢と疾患、鍋の出土状況ならびに種類・特徴、共伴した副葬品等である。

墓の実年代が判明したのは49基中4基のみで、すべて墓碑に刻まれた年号に基づく。被葬者の没年が判らない45墓については、六道銭として副葬された銭貨の組み合わせ若しくは副葬された陶磁器などから年代を推定した。筆者は、以前、東北地方において被葬者の没年が判明している近世墓に関して、副葬された六道銭の種類を調べ、六道銭の組み合わせ毎におおよその実年代観を示した(関根1999)。今回もその年代観に則り、期(寛永通寶を含まず渡来銭のみで構成される)を1635年以前に、期(古寛永通寶を含み新寛永を含まない)を1636年～1665年に、期(新寛永背文銭：「文銭」を含み新寛永背無文銅銭：「新寛永」を含まない)を1666年～1708年に、a・b期(新寛永を含み新寛永鉄銭：「鉄銭」を含まない)を1709年～1830年代に、c・d期(鉄銭・天保通寶・文久永寶などを含み近代銭貨を含まない)を1840年代～1870年代に、近代銭貨を含む時期を1880年代以降に、それぞれ年代比定した。なお、期は、洪武通寶(1368年初鑄)や永樂通寶(1408年初鑄)といった明銭を含まないa期と、明銭を含むb期に細分した。

被葬者の性別と年齢の判定は、人骨の形質人類学的所見と墓碑に刻まれた戒名等により行った。人骨の鑑定が行われている場合、骨に疾患の痕跡が確認されたか否かについても注意を払った。

3. 東北地方における調査事例とその検討

鍋被り墓の立地

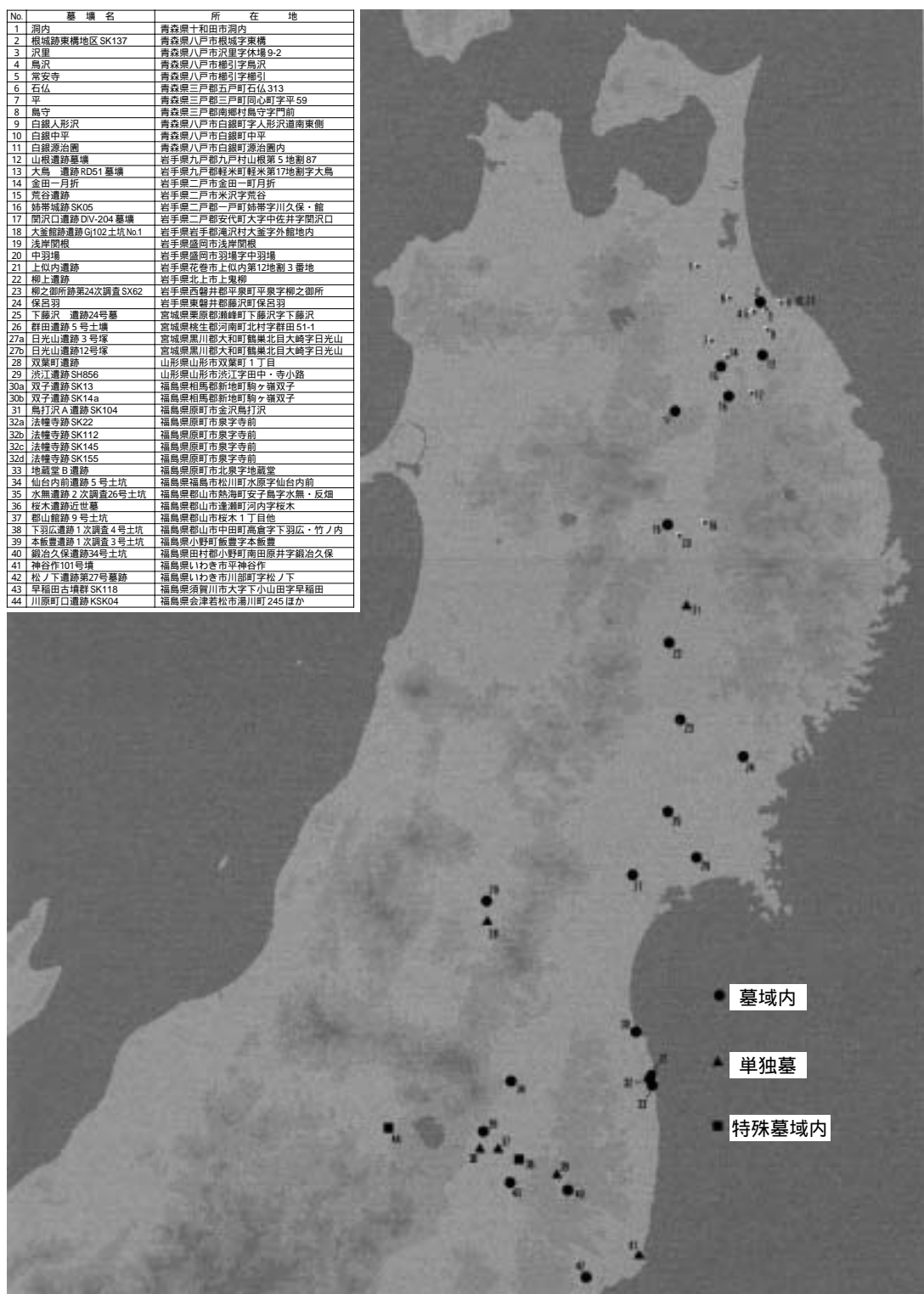
鍋被り墓は、中近世の葬制としては極めて特異な例と言え、通常の墓との位置関係が問題となる。近年の鍋被り墓研究は単独墓のみを取り上げる傾向が強まり、鍋被り墓の立地について基本的な事実関係が充分理解されているとはいいがたい状況にある。本論では、鍋被り墓の立地を、墓域内、特殊墓域内、単独墓の3類型に分類した。ここで特殊墓域内としたのは、福島県郡山市下羽広遺跡(福森・高井1996)と会津若松市川原町口遺跡(堀金1994)の2遺跡である。下羽広遺跡では、播鉢を頭に被せた可能性のある4号土坑以外にも江戸時代の墓が2基発見されているが、2基とも火葬墓であり、土葬の鍋被り墓である4号土坑を含め、遺跡内で発見された3基の近世墓全てが特殊な状況を呈している。川原町口遺跡は若松城の城下に位置し、「伝葦名時代絵図」によれば、天正18年(1590)の蒲生氏郷の入府以前、調査地附近には寺院が存在したとされる。川原町口の名称は、外堀と土塁によって分けられた内郭と外郭とを結ぶ16の郭門に由来し、調査地点は、郭門から南東に約200m内側に入った場所にあたる。若松城正保3年(1646)に描かれた「若松城絵図」では、この場所に侍屋敷が描かれている。川原町口遺跡では、鍋被り墓であるKSK04以外に、ほぼそれと同時期と考えられる中世末・近世初頭の墓3基が発見されているが、うち1基は確実に火葬墓であり、下羽広遺跡同様、通常の墓域でなかった可能性が考えられる。

不時発見のため立地不明の事例も少なくないが、東北中部・北部では墓域内から発見される事例が圧倒的に多く、東北南部では、墓域内、特殊墓域内、単独墓が混在している状況が読みとれる(第1図)。東北南部の様相は、桜井準也らにより明らかにされてきた関東地方の状況に近く、鍋被り墓が立地の点でも、通常の墓と区別される傾向にあったことを窺わせる。一方、東北中部より北では、鍋被り墓も通常の墓域内に営まれ、少なくとも立地の点では特別扱いされていないように見受けられる。この点に関しては、墓域内から発見された鍋被り墓が、他の通常の墓のなかに混在しており、位置的に何かしら区別されたような形跡は認めがたいということからも支持されよう(第2図)。すなわち、地域によって、鍋被り墓そのものに対する意識(それはとりもなおさず鍋を被せられた死者の扱いということになるが)に違いがあった可能性を指摘できるのである。

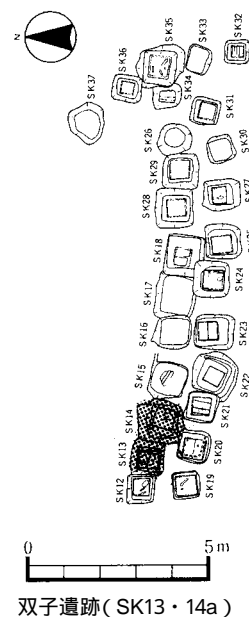
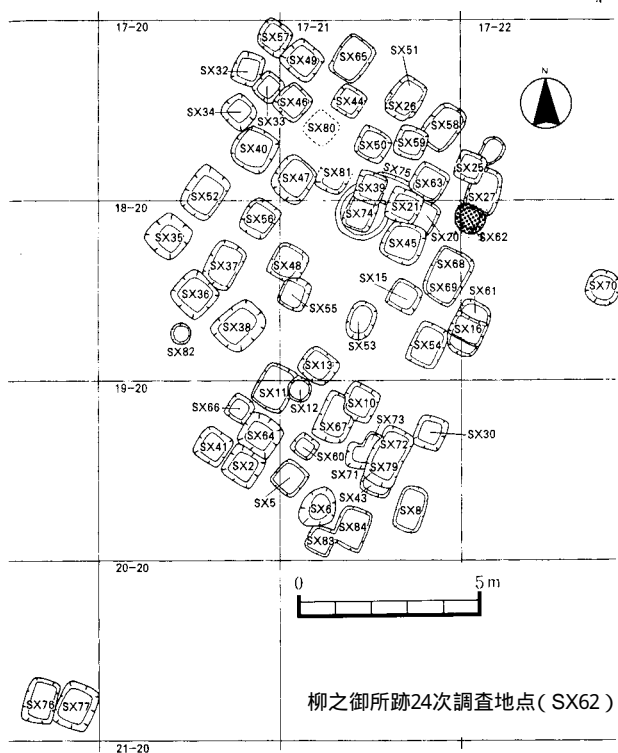
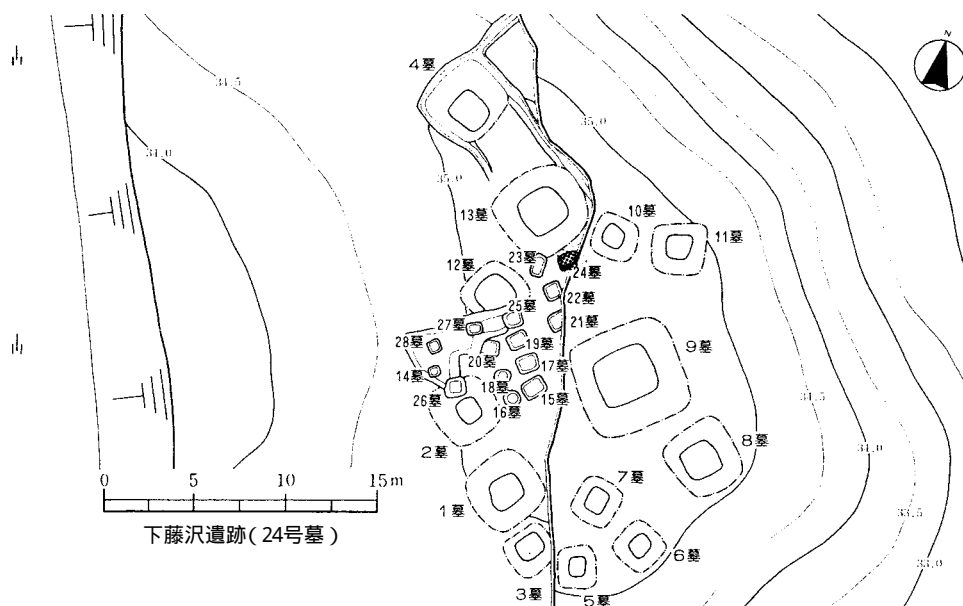
鍋の出土状況

墓域内における鍋の出土状況をみると、逆さに伏せたかその可能性が高い例が31件と最も多く、正位に置かれた例2件、横倒しの状態で発見された例4件、その他1件、不明11件を大きく引き離している。ここで人骨が残っていた墓を対象に、遺体と鍋との位置関係を検討する(第3図)。松ノ下遺跡第27号墓跡、根城跡東構地区SK137、関沢口遺跡D-204墓域では、伏せた鍋を遺体の頭に被せた状況が明らかにみてとれる。鍛冶久保遺跡34号土坑では、人骨の脇からやや斜めながら横倒しの状態で鉄鍋が出土している。注目されるのは、大釜館跡遺跡Gj102土坑N0.1における鉄鍋の出土状態である。ここでは頭骨に接して、内部に緇銭80枚を入れ、伏せた漆器の椀によって蓋がなされた鉄鍋が正位の状態で発見された。鉄鍋を含め土坑内における遺物の出土状況は、それらがま

No.	墓 塚 名	所 在 地
1	洞内	青森県十和田市洞内
2	根城跡東横地区 SK137	青森県八戸市根城字東横
3	沢里	青森県八戸市沢里字休場 9-2
4	鳥沢	青森県八戸市柳引字鳥沢
5	荒谷寺	青森県八戸市柳引字柳引
6	石仏	青森県三戸郡五戸町石仏 313
7	平	青森県三戸郡三戸町同心町字平 59
8	島守	青森県三戸郡南郷村島守字門前
9	白銀人形沢	青森県八戸市白銀町字人形沢道南東側
10	白銀中平	青森県八戸市白銀町中平
11	白銀源治園	青森県八戸市白銀町源治園内
12	山根遺跡墓域	岩手県九戸郡九戸村山根第 5 地割 87
13	大島 遺跡 RDS1 墓域	岩手県九戸郡稗米町稗米第 17 地割字大島
14	金田一月折	岩手県二戸市金田一月月折
15	荒谷遺跡	岩手県二戸市米沢字荒谷
16	姉帯城跡 SK05	岩手県二戸郡一戸町姉帯字川久保・館
17	関沢口遺跡 DIV-204 墓域	岩手県二戸郡安代町大字中佐井字関沢口
18	大釜館跡遺跡 G102 土坑 No.1	岩手県岩手郡滝沢村大釜字外龍地内
19	浅岸間根	岩手県盛岡市浅岸間根
20	中羽墳	岩手県盛岡市羽塚字中羽墳
21	上似内遺跡	岩手県花巻市上似内第 12 地割 3 番地
22	柳上遺跡	岩手県北上市上奥柳
23	柳之御所跡第 24 次調査 SX62	岩手県西磐井郡平泉町平泉字柳之御所
24	保呂羽	岩手県東磐井郡藤沢町保呂羽
25	下藤沢 遺跡 24 号墓	宮城県栗原郡瀬峰町下藤沢字下藤沢
26	群田遺跡 5 号土壇	宮城県桃生郡河内町北村字群田 51-1
27a	日光山遺跡 3 号塚	宮城県黒川郡大和町鶴舞北目大崎字日光山
27b	日光山遺跡 12 号塚	宮城県黒川郡大和町鶴舞北目大崎字日光山
28	双葉町遺跡	山形県山形市双葉町 1 丁目
29	渋江遺跡 SH856	山形県山形市渋江字田中・寺小路
30a	双子遺跡 SK13	福島県相馬郡新地町駒ヶ嶺双子
30b	双子遺跡 SK14a	福島県相馬郡新地町駒ヶ嶺双子
31	鳥打沢 A 遺跡 SK104	福島県原町市金沢鳥打沢
32a	法幢寺跡 SK22	福島県原町市泉字寺前
32b	法幢寺跡 SK112	福島県原町市泉字寺前
32c	法幢寺跡 SK145	福島県原町市泉字寺前
32d	法幢寺跡 SK155	福島県原町市泉字寺前
33	地藏堂 B 遺跡	福島県原町市北泉字地藏堂
34	仙台南前遺跡 5 号土坑	福島県福島市松川町水原字仙台南前
35	水無遺跡 2 次調査 26 号土坑	福島県郡山市熱海町安子島字水無・反畑
36	桜木遺跡近世墓	福島県郡山市蓬瀬町河内字桜木
37	郡山熊跡 9 号土坑	福島県郡山市桜木 1 丁目他
38	下羽広遺跡 1 次調査 4 号土坑	福島県郡山市中田町島倉字下羽広・竹ノ内
39	本館遺跡 1 次調査 3 号土坑	福島県小野町飯豊字本館遺
40	鍛冶久保遺跡 34 号土坑	福島県田村郡小野町南田原字鍛冶久保
41	神谷作 101 号墳	福島県いわき市平神谷作
42	松ノ下遺跡第 27 号墓跡	福島県いわき市川部町字松ノ下
43	早稲田古墳群 SK118	福島県須賀川市下小山田字早稲田
44	川原町口遺跡 KSK04	福島県会津若松市湊川町 245 ほか



第 1 図 東北地方の鉄鍋・鐏鉢を出土した墓(16世紀末～19世紀)



アミのかかっている
遺構が銅被り葬墓

第2図 墓域内における銅被り葬墓の位置

さしく副葬品であることを意味している。現象としてみれば、大釜館跡の事例は、いわゆる狭義の鍋被り葬墓とは明らかに異なる。しかし、後述するように、その意味するところは他の鍋被り葬墓と共通する可能性が考えられるため、本論では、鍋被り葬墓の定義を「墓壇内から形をほぼとどめた鉄鍋や掘鉢を出土した墓」にまで拡大し、検討の対象とした。

鍋被り葬墓の年代

東北地方における鍋被り葬墓のなかで実年代が判明したのは、年代の古い順に、岩手県藤沢町保呂羽(1765年)、宮城県河南町群田遺跡5号土壇(1784年)、福島県新地町双子遺跡SK14a(1828年)、同SK13(1875年)の4基で、いずれも年号を刻んだ墓碑を伴っている。このなかで最も注目されるのは、19世紀に属する双子遺跡の2例である。近年、関東地方の事例を中心に進められてきた鍋被り葬研究において、民俗伝承と整合性を図る上で、考古資料のなかに19世紀以降の事例がほとんど確認できない点が問題となっている(桜井2001、長佐古2001a、田中2002)。双子遺跡SK13は、墓碑から明治8年(1875)に84歳で亡くなった老女の墓であることが判るが、後述するように、通常土葬に用いられる箱棺の中に火葬骨の入った骨箱を置き、その上に吊耳型の鉄鍋を伏せるという特殊な葬法をとっている。双子遺跡では27基の墓が検出されているが、火葬墓はSK13の1基のみである。双子遺跡SK13は、近代以降も鍋被り葬が存在することを証明すると共に、被葬者に通常とは異なる遺体の処理がなされたことを示す貴重な事例といえる。

墓碑、六道銭をはじめとする副葬品を参考に、44遺跡49例の鍋被り葬墓を時期別に分けると、16世紀末～17世紀初頭(六道銭編年では 期に相当)21基、18世紀～19世紀中葉(同じく 期相当)18基、19世紀後葉1基、時期不明9基となる(第1表参照)。先に19世紀の鍋被り葬墓として、墓碑から実年代の判明する双子遺跡の例を取り上げたが、それ以外にも19世紀に入る事例は散見される。例えば、福島県原町市の法幢寺跡では4基の鍋被り葬墓が検出されているが、SK145と155の2基は大堀相馬焼が副葬されており、相馬焼の編年(関根1998)から19世紀前葉の年代を与えることが出来る。東北地方の鍋被り葬の年代上問題なのは、むしろ17世紀中葉から末葉(六道銭編年の 期から 期)の確実な事例が見当たらない点にある。

鍋被り葬墓の埋葬施設と副葬品

【埋葬施設・埋葬姿勢】

大部分の鍋被り葬墓は、それぞれの時代性・地域性を反映した埋葬施設・埋葬姿勢を採用しており、その点では他の通常の墓と変わらない(第1表)。強いて通常の墓と異なる事例を探せば、岩手県九戸郡九戸村山根遺跡と福島県相馬郡新地町双子遺跡SK13が挙げられようか。

山根遺跡の鍋被り葬墓は、使われている一文字湯口の内耳鉄鍋からみて16世紀後半～17世紀初頭の年代を与えることが出来る。山根遺跡のある北東北では、この時期の墓は土壇墓が圧倒的に多く、通常、遺体は屈葬された状態で葬られている。しかし、山根遺跡の事例は棺の痕跡こそ確認されなかったものの、遺体は蹲踞の姿勢をとっていたことが確認されている(草間・森本1972)。この地域で座葬が一般的になるのは早くても17世紀末以降と考えられ、その意味では山根遺跡の鍋被り葬墓

にはやや先進的とも言える埋葬形態が採用されていることになる。

双子遺跡SK13は、27基検出された双子遺跡の墓の中で唯一の火葬墓であり、かつ通常土葬に用いられる箱棺の中に火葬骨の入った骨箱を置き、その上に吊耳型の鉄鍋を伏せるという特殊な葬法をとっている。ただ単に鉄鍋を被せるだけでは事足りず、遺体を火葬処理するという「異常」な葬法をとる一方で、土葬用の箱棺を使って通常の墓と同じ墓域に埋葬し、外見上は他の墓と区別がつかないように処置を施している。そこには、生前特殊な状況にあった被葬者の死の穢れを「鍋」と「火」により祓い清めると共に、その穢れの存在をも隠し封印してしまおうとする意図が窺える。

【副葬品】

鍋被り葬墓も、他の通常の墓同様、六道銭や煙管が副葬されるケースが多いなかで、通常の墓に比べ副葬品の豊かな「厚葬」の事例が存在する（第1表）。その最たる例が青森県十和田市の洞内で、通常みられる六道銭に加えて、兜・甲冑・刀剣・馬具・鉄鍬などの武器・武具が副葬されていたほか、遺体には武田菱の紋が入った金襴の袍が掛けられていたとされる（神田1887）。洞内ほどではないにせよ、青森県八戸市根城跡東構地区SK137、同沢里、岩手県九戸郡軽米町大鳥 遺跡RD51墓墳、二戸郡一戸町姉帯城跡SK05なども通常の墓に比べ副葬品の数や質が勝っている。これら「厚葬」の事例が全て、北東北の初期（16世紀後半～17世紀初頭）の鍋被り葬墓に集中しているという事実は、鍋被り葬の起源とその本質的意味合いを考える上で重要である。

被葬者（第2表）

【性別・年齢】

人骨の形質から被葬者の性や死亡時の年齢が推定されている例が9件、伴った墓碑に刻まれた戒名から特定できるものが4件、合計13件に関して考察が可能である。性別では、男性7件、女性6件で、特にどちらかの性に偏ることはない。年齢は、20歳代と推定されるものから84歳まで幅広いが、全て成人であり子供は含まれない。桜井準也によれば、関東地方では、人骨の分析が行われた鍋被り葬人骨10体中、男性5例、女性3例、性別不明2例であり、年齢は青年期から壮年期が主体という（桜井2001）。被葬者に関して、性別や年齢という点では、特に地域的な違いは見あたらない。男女を問わず、成人に鍋が被せられたと見なせるであろう。

【疾患】

人骨の分析が行われた9例のなかで、保存状態が比較的良く、骨病変の有無を確認することが可能であったと思われる事例が7例ある。そのなかで、骨に病変が確認されたのは、森本岩太郎により鑑定が行われた根城跡東構地区SK137と沢里の2体のみである。前者は、口蓋骨下面に吸収性骨炎像が存在し、切歯窩（正中切歯後方で口蓋骨の一つの孔）が異常に拡大しており、ハンセン病の疑いがあるとされた（工藤・佐々木1983）。沢里例は、脊椎被裂症を思わせる脊柱仙骨部の欠損や胸椎椎弓板から脊柱管方向へ突出する異常骨棘が認められたものの、ハンセン病などに由来するものではない。沢里例を含めても骨病変の出現頻度は、7例中2例であり、3割弱に過ぎない。桜井準也によれば、関東地方では、人骨の分析が行われた鍋被り葬人骨10体中、5体、即ち5割に骨病変が

第1表 鍋被り墓の年代・構造・副葬品

No.	墓 塚 名	年 代	埋葬施設・埋葬姿勢	副 葬 品 (鉄鍋以外)	文 献
1	洞内	I b	不明	洪武通寶 無文銭 兜 甲冑 刀剣 馬具 鉄鑓 金襴の袍	神田1887 馬場1940
2	根城跡東横地区 SK137	I b	木棺 北西頭位屈葬	開元通寶 2 北宋銭 8 洪武通寶 28 無銘銭 6	工藤・佐々木1983
3	沢里	16c後～17c初	土葬姿勢不明	太刀 1	森本1996
4	鳥沢	16c後～17c初	土葬姿勢不明	石製の鉢	小井川1954
5	常安寺	?	不明		小井川1954
6	石仏	16c後～17c初	土葬姿勢不明		小井川1954
7	平	16c後～17c初	北頭位屈葬?		小井川1954
8	鳥守	?	土葬姿勢不明		小井川1954
9	白銀人形沢	16c後～17c初	土葬姿勢不明		音喜多1954
10	白銀中平	?	土葬姿勢不明	煙管	音喜多1954
11	白銀源治園	?	土葬姿勢不明	煙管	音喜多1954
12	山根遺跡墓壇	16c後～17c初	座葬(蹲踞)		草間・森本1972
13	大鳥1遺跡 RD51墓壇	I b	北頭位屈葬	洪武通寶 3 無銘銭87 不明銅銭 3 鎌 1 漆器 1	阿部・高橋1999 高橋1997
14	金田一月折	16c後～17c初	土葬姿勢不明		草間・森本1972
15	荒谷遺跡	I	土葬姿勢不明	銭貨 8 (嘉祐通寶、無文銭ほか)	井上2002
16	姉帯城跡 SK05	I b	土葬姿勢不明	和鏡 3 銭貨30(洪武通寶ほか) 鉄鑓 1 苧引金 1 火打金 1 他	中村・高田1999
17	関沢口遺跡 DⅣ - 204墓壇	Ⅳ a	南西頭位屈葬	古寛永 1 新寛永 2 砥石 1 漆器 1 漆の濃殻	玉川1986
18	大釜館跡遺跡 GJ102土坑 No.1	I b	南西頭位屈葬	熙寧元寶 3 洪武通寶 24 無文銭57 不明銅銭 2 漆器皿 1	井上1996 2002
19	浅井間根	16c後～17c初	土葬姿勢不明		草間・森本1972
20	中羽場	16c後～17c初	土葬姿勢不明		小笠原1929
21	上似内遺跡	I b	土葬姿勢不明	永楽通寶 27 大観通寶 1 宣徳通寶 1 硯 1 鉈 1	瀧・吉田2002
22	柳上遺跡	18c?	不明		羽柴2002
23	柳之御所跡第24次調査 SX62	Ⅳ a	土葬姿勢不明	元豊通寶 1 新寛永 8 不明銅銭 1 漆器 1 鉄 1 雁首 1 吸口 1	本澤1990 羽柴1996
24	保呂羽	1765年	土葬姿勢不明		司東1981
25	下藤沢「遺跡24号墓	Ⅳ a	不明	古寛永 9 文銭 7 新寛永 8 雁首 1	阿部1988
26	群田遺跡 5号土壇	1784年 Ⅳ a	不明		中野1993
27a	日光山遺跡 3号塚	I b	長方棺 土葬姿勢不明	北宋銭36 永楽通寶 1 不明銅銭 1 漆器 2 裝飾品 1 刀子 1	斎藤1981
27b	日光山遺跡12号塚	Ⅳ a	不明	古寛永 1 新寛永 2 肥前呉器手碗 1 刀子 1	斎藤1981
28	双葉町遺跡	?	土葬姿勢不明		未報告 齊藤仁氏御指示
29	洗江遺跡 SH856	18c末	土葬姿勢不明	大堀相馬腰折碗(18c末) 1 肥前磁器中碗(18c) 1	押切ほか2002
30a	双子遺跡 SK13	1875年	箱棺内骨箱 火葬	白木桶 1 甕甲製斧 1 木製数珠玉	大竹ほか1990
30b	双子遺跡 SK14a	1828年	箱棺 座葬		大竹ほか1990
31	鳥打A遺跡 SK104	Ⅳ a	土葬姿勢不明	古寛永 1 新寛永 8	安田・山崎ほか1994
32a	法幢寺跡 SK22	18c～19c前	不明	寛永通寶 2 数珠玉68	堀ほか2001
32b	法幢寺跡 SK112	18c～19c前?	土葬不明		堀ほか2001
32c	法幢寺跡 SK145	19c前	不明	大堀相馬(中碗 1・小碗 1・蓋物 1(19c前))	堀ほか2001
32d	法幢寺跡 SK155	19c前	不明	肥前磁器中碗(18c) 1 大堀相馬鉄絵中碗(19c前) 1	堀ほか2001
33	地蔵堂B遺跡	?	不明		堀ほか1997
34	仙台内前遺跡 5号土坑	I a	土葬姿勢不明	元豊通寶 1 祥符元寶 1 元寶 1 不明銅銭 3	武田・鈴木1988
35	水無遺跡 2次調査26号土坑	?	不明		角田1989
36	桜木遺跡近世墓	?	土葬姿勢不明	寛永通寶 5	鈴木ほか1983
37	郡山館跡 9号土坑	Ⅳ a	木棺 土葬姿勢不明	古寛永 5 新寛永 1	武田・高田1998
38	下羽広遺跡 1次調査 4号土坑	Ⅳ d	不明	文久永寶 1	福森・高井1996
39	本飯豊遺跡 1次調査 3号土坑	I	土葬姿勢不明	開元通寶 1 景祐元寶 1 鉄製品 1	飯村・佐藤ほか1993
40	鍛冶久保遺跡34号土坑	18c末～19c前	土葬姿勢不明	鑒の柄 1 雁首 1 吸口 1	遠藤ほか1993
41	神谷作101号墳	I a	土葬姿勢不明	銭貨 6 (宋銭)	白土1949
42	松ノ下遺跡第27号墓跡	Ⅳ b	座葬	新寛永 7	中山ほか2001
43	早稲田古墳群 SK118	Ⅳ a	北頭位屈葬	文銭 2 新寛永 4 真珠玉 1	大河ほか1982
44	川原町口遺跡 KSK04	I b	不明	永楽通寶 3	堀金1994

第2表 鍋被り墓の被葬者

墓 塚 名	性	年 齢	疾患等	根拠	備 考	文 献
根城跡東横地区 SK137	女	壮年	ハンセン病の疑い	人骨	根城南部家中	工藤・佐々木1983
沢里	男	熟年	脊椎変性症 胸椎椎弓板に異常骨棘	人骨	根城南部家中	森本1996
石仏	男	20歳代	不明	人骨		小井川1954
山根遺跡墓壇	男	壮～熟年	認められない	人骨		草間・森本1972
関沢口遺跡 DⅣ - 204墓壇	男	50歳前後	認められない	人骨	漆職人	玉川1986
保呂羽	女	不明	不明	墓碑	切支丹伝承	司東1981
群田遺跡 5号土壇	男	?	不明	墓碑		中野1993
双子遺跡 SK13	女	84歳	不明	墓碑	A 家	大竹ほか1990
双子遺跡 SK14a	女	?	不明	人骨	A 家	大竹ほか1990
本飯豊遺跡 1次調査 3号土坑	女	青～熟年	不明	人骨		飯村・佐藤ほか1993
鍛冶久保遺跡34号土坑	男	青～壮年	認められない	人骨		遠藤ほか1993
松ノ下遺跡第27号墓跡	女	熟年	認められない	人骨		中山ほか2001
早稲田古墳群 SK118	男	壮年	認められない	人骨		大河ほか1982

確認されている(桜井2001)。

ところで、ハンセン病は、抗酸菌の仲間属する癩菌と呼ばれる病原菌によって生ずる感染症である。ハンセン病は、基本的に臨床的・免疫的特徴により、癩種型、類結核型、未定型、混合型に分けられる。このうち癩種型では、慢性の鼻炎とそれに引き続く顔面中央部の骨の破壊が、類結核型では四肢末梢神経の萎縮によって手や足の指骨の変形が生じる場合がある^(註1)。性病性梅毒は、トレポネーマ・パリドウムという病原微生物が、主として性交に際し、生殖器の皮膚や小さな損傷部位から侵入し感染を起こす、性感染症の代表的疾患である。梅毒は、感染後の症状等により3段階の病期に分けられているが、ゴム腫と呼ばれる硬い腫瘤によって骨に異常をきたすのは、感染後数年を経た第3期になってである^(註2)。ハンセン病患者のうち、骨に異常が見られるのは15%程度と考えられている(鈴木1998)。出土人骨に骨病変が観察されないからといって、被葬者が必ずしもこの種の病に罹患していなかったことにはならない点は注意しなければならないが、東北地方の鍋被り葬人骨が、関東地方のそれに比べ、骨病変の出現頻度が低い点は肯定されよう。東北地方の鍋被り葬全てをハンセン病や梅毒といった特殊な病と結びつけることには、関東地方以上に無理があるように思える。民俗事例にいわれるとおり、特殊な病気で死亡した者の頭部に鍋を被せて葬ったことはあったにせよ、それ以外の理由についても検討する必要はあろう。

【職種・社会的地位】

青森県根城東構地区SK137と沢里の2例は、その立地から根城との関連性が濃厚である。特に沢里例は、太刀を伴って熟年の男性が埋葬されており、被葬者が根城南部家の家臣であったことが確実視される。東構地区は、家臣団と鍛冶集団が入り交じる地区と考えられているが(佐々木浩一氏の御教示による)、SK137には金箔を貼った漆器が副葬されており、被葬者である女性の身分は、武士階層と思われる。同様に、青森県十和田市洞内例もまた、甲冑・刀剣をはじめとする副葬品からみて、被葬者は武人であった可能性が高い。岩手県一戸町姉帯城跡は、中世南部氏の一族姉帯氏の居城であり、「九戸の戦い」に際して、天正19年(1591)8月、蒲生氏郷軍の攻撃を受け落城したと言われる。鍋被り葬墓であるSK05を含め10数基の墓壙が発見されているが、遺構の切り合い関係から、これらの墓壙は最も新しい段階に位置づけられている。報告者は、これらの墓を「廃城となった九戸の戦いに伴う戦死者の墓」と推定している(中村・高田1999)。九戸の戦いの戦死者であるか否かはともかく、藤花双鶴鏡・秋草双雀鏡・愛染明王菊花散蓬萊鏡の和鏡3枚をはじめとして、銭、鉄鏝、火打金、苧引金など豊富な副葬品をともなうSK05には、上級武士層が葬られていた可能性が極めて高い。

以上4例が武士階層の人間に鍋を被せて葬ったと考えられる事例である。使われた鉄鍋はいずれも内耳であり、年代的には全て16世紀末から17世紀初め頃と推定される。今回集成した鍋被り葬墓44遺跡49例中、16世紀末から17初頭に位置づけられる墓は21基あるので、少なく見積もっても、初期の鍋被り葬墓のうち5基に1基は武士階層が葬られていることになる。また、同時期の鍋被り葬墓のなかには、岩手県九戸村山根遺跡や宮城県大和町日光山遺跡3号塚のようにマウンドを有する

墓も含まれており、厚葬の傾向が窺える。初期の鍋被り葬の被葬者に武士階層が多く含まれている点は、鍋被り葬の本質を考える上で大変重要である。

関沢口遺跡のある岩手県安代町中佐井地区から隣の浄法寺町にかけての地域は、江戸時代、浄法寺塗とよばれる漆器の一大生産地であった。鍋被り葬が確認された関沢口遺跡のD - 204墓墳からは、寛永通寶3枚とともに漆器、砥石、漆の漉殻が発見されている。漆の漉殻は隣接する墓からも出土している。D - 204墓墳に鍋を被せられて葬られたのは、浄法寺塗の漆器職人と思われる。

岩手県藤沢町保呂羽例は、墓碑から明和2年(1765)に没した次右衛門の妻が被葬者と推定される。保呂羽例を紹介した司東真雄によれば、次右衛門は有名な大籠村の「転切支丹」平十郎の孫に当たるといふ(司東1981)。「転切支丹」すなわち元キリシタン信者が死亡した場合、村肝入検断所五人組の立ち合いや代官所の検死など、遺体の埋葬に際して特別な手続きが必要とされる。キリシタン禁制下にあつては、いうまでもなく「転切支丹」の死は特別な死であり、忌むべき対象であつたと推定される。「転切支丹」の頭に被せられた鉄鍋からは、「汚れ」を洗い清め、災いを封印する意図が読みとれよう。

鍋を被せられた被葬者の職種・階層は多岐にわたる。これは特定の職種や階層そのものが理由となつて、鍋が被せられたのではないことを意味している。この点に関しては、初期の鍋被り葬において武士階層が多くその対象となつている点からみて、鍋被り葬が職業や階層上の弱者を差別するものでもなかつたことは明白であらう。

鉄鍋の種類と地域性

北日本の鉄鍋については、越田賢一郎による詳細な検討があり、基本的な変遷観が示されている(越田1984・1996・1998)。本稿で扱った44遺跡49例確認された鍋被り葬墓からは、播鉢を用いた下羽広例を除き、全て鉄鍋が出土している。ここでは、形状分類に基づき、鉄鍋の年代や地域性を検討する。鉄鍋は、全体の形状により内耳・吊耳・片口の3種に大別し、大きさや湯口の形状、脚の有無に注目した(第3表)。

内耳鉄鍋を用いた鍋被り葬は16例確認された(第4図)。青森県東南部から岩手県北部に集中するが、東北南部でも、福島市仙台南前遺跡5号土坑といわき市神谷作101号墳の2遺跡に存在する。湯口の形状が判明した8例中、一文字湯口が7例と圧倒的多数を占め、湯口が丸形を呈するのは、仙台南前の1件のみである。北海道には丸形の湯口で脚を有する内耳鉄鍋が存在しており、越田により16世紀後半から17世紀代の年代が与えられている(越田1984)。今回扱った東北地方の鍋被り葬墓に使われた内耳鉄鍋には、有脚の例は見当たらなかつた。内耳鉄鍋の口径は平均約32cmもあり、被葬者の頭や顔を覆うのに十分な大きさがある。

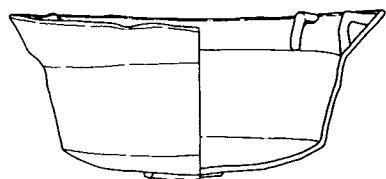
吊耳鉄鍋は、腰部から口縁まで直線的に開くもの(A類)と、体部に屈曲を有し口縁部外帯が形成されるもの(B類)に細分され、前者が8例、後者が3例、細別不明5例が確認された(第5図)。分布図から明らかなように、A類が東北北半を中心に広く分布するのに対して、B類は東北南部の福島県南半部でしか認められない。B類が主体をしめる福島南半部で唯一A類に属する小野町本飯豊

遺跡例は、湯口が一文字形であり、東北北部の内耳鉄鍋の生産に携わっていた技術集団の手になる製品であろう。福島県北の伊達郡川俣町河股城跡では、江戸神田の出職鋳物師粉川松之助と地元の鋳物師が使用した19世紀前半代の鋳造工房が確認されているが、そこで生産された吊耳鉄鍋は、体部に屈曲のないA類が主体を占めるようである（高橋主次氏の御教示による）。今後、鍋被り葬以外の出土鉄鍋や北関東の事例により検証する必要があるが、A類を旧南部藩・仙台藩領などに代表される東北中部以北の製品、B類は東北南部に特徴的な製品とみなすことができるかもしれない。吊耳鉄鍋の口径は、最大28cm、最小17.9cmで、平均約22.7cmである。内耳鉄鍋に比してかなり小振り、必ずしも被葬者の頭部や頭全体を覆うことの出来ないものも含まれている。なお、吊耳鉄鍋は確認される限り全て底部に3足を有している。

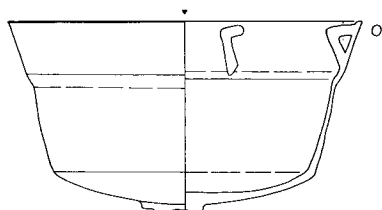
片口鉄鍋は、いわゆる「爛鍋」で、吊耳鉄鍋と同じ基準で、A・Bの2種類に細別できる。A類3例、B類1例、細別不明2例が確認された。点数が少ないため明確ではないが、吊耳同様の地域性が存在する可能性がある（第6図）。口径は25.8～22.5cmと、吊耳鉄鍋に近い。

第3表 鍋被り葬墓出土の「鍋」一覧

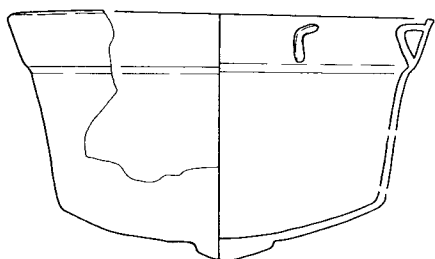
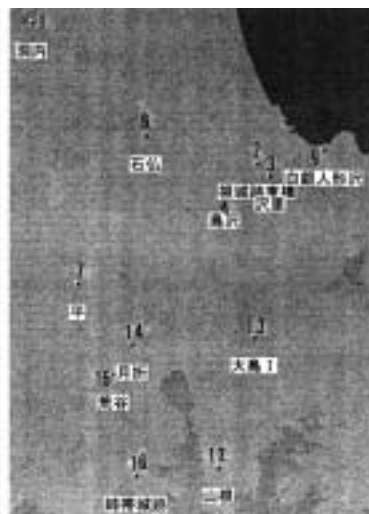
No.	墓 墳 名	年 代	型 式	口径 cm	湯口の形状	脚	備考	実測図
1	洞内	I b	内耳	33.3	不明	なし	明治19年出土	-
2	根城跡東構地区 SK137	I b	内耳	29.7	一文字湯口	なし		第4図
3	沢里	16c後～17c初	内耳	37.8	一文字湯口	なし	昭和63年農作業中出土	第4図
4	鳥沢	16c後～17c初	内耳	32.4	不明	なし		-
5	常安寺	?	吊耳	不明	不明	3?足		-
6	石仏	16c後～17c初	内耳	不明	不明	なし	昭和12・13年頃出土	-
7	平	16c後～17c初	内耳	27.3	不明	なし	昭和17年7月23日出土	-
8	鳥守	?	不明	不明	不明	不明		-
9	白銀人形沢	16c後～17c初	内耳	27	一文字湯口	なし		-
10	白銀中平	?	片口	不明	不明	不明	昭和26年出土	-
11	白銀源治園	?	片口	不明	不明	不明	昭和27年出土	-
12	山根遺跡墓壇	16c後～17c初	内耳	32.4	一文字湯口	なし	盛土墓	第4図
13	大鳥1遺跡 RD51墓壇	I b	内耳	28.5	一文字湯口	なし	内面底部・耳に繊維	第4図
14	金田一月折	16c後～17c初	内耳	34	一文字湯口	なし	黒沢桓夫氏談	第4図
15	荒谷遺跡	I	内耳	不明	不明	なし	平成3年調査 未報告	-
16	姉帯城跡 SK05	I b	内耳?	不明	不明	不明	細片化	-
17	間沢口遺跡 DⅣ - 204墓壇	Ⅳ a	吊耳A	23	丸形湯口	3足	3穴耳 欠損部銅鍍掛け	第5図
18	大釜館跡遺跡 Gj102土坑 No.1	I b	片口A	22.5	丸形湯口	3足	未報告	第6図
19	浅岸関根	16c後～17c初	内耳	35.4	一文字湯口	なし	吉田義照氏談	第4図
20	中羽場	16c後～17c初	内耳	不明	不明	不明		-
21	上似内遺跡	I b	不明	不明	不明	3?足		第6図
22	柳上遺跡	18c?	吊耳	不明	不明	不明	報告書に記載なし	-
23	柳之御所跡第24次調査 SX62	Ⅳ a	吊耳A	24.5	丸形湯口	3足	1穴耳	第5図
24	保呂羽	?	不明	不明	不明	不明		-
25	下藤沢Ⅱ遺跡24号墓	Ⅳ a	吊耳A	23.3	不明	3足	1穴耳	第5図
26	群田遺跡5号土坑	1784年 Ⅳ a	吊耳A	21.6	不明	3足	1穴耳 1784年没	第5図
27a	日光山遺跡3号塚	I b	不明	不明	不明	不明	盛土墓(円形)	-
27b	日光山遺跡12号塚	Ⅳ a	吊耳	不明	不明	不明	盛土墓(円形)	-
28	双葉町遺跡	?	片口A	不明	丸形湯口	3足	内面に多量の粉付着	-
29	洗江遺跡 SH856	18c末	吊耳A	23	丸形湯口	3足		第5図
30a	双子遺跡 SK13	1875年	吊耳A	21	不明	3足	1穴耳 1875年没	第5図
30b	双子遺跡 SK14a	1828年	吊耳	不明	不明	不明	1828年没荒家墓	-
31	鳥打沢A遺跡 SK104	Ⅳ a	吊耳A	22.4	不明	3足	1穴耳	第5図
32a	法幢寺跡 SK22	18c～19c前	不明	不明	不明	不明		-
32b	法幢寺跡 SK112	18c～19c前?	不明	不明	不明	不明		-
32c	法幢寺跡 SK145	19c前	不明	不明	不明	不明		-
32d	法幢寺跡 SK155	19c前	不明	不明	不明	不明		-
33	地藏堂B遺跡	?	吊耳	不明	不明	不明		-
34	仙台内前遺跡5号土坑	I a	内耳	33.4	丸形湯口	なし		第4図
35	水無遺跡2次調査26号土坑	?	不明	不明	不明	不明		-
36	桜木遺跡近世墓	?	片口B	25.8	不明	3足		第6図
37	郡山館跡9号土坑	Ⅳ a	片口A	23.6	丸形湯口	3足		第6図
38	下羽広遺跡1次調査4号土坑	Ⅳ d	播鉢	20.1			在地産 底に「キハ」墨書	第6図
39	本坂曹遺跡1次調査3号土坑	I	吊耳A	17.9	一文字湯口	3足	1穴耳	第5図
40	鍛冶久保遺跡34号土坑	18c末～19c前	吊耳B	23.8	不明	3足	5穴耳	第5図
41	神谷作101号墳	I a	内耳	20.8	不明	なし		第4図
42	松ノ下遺跡第27号墓跡	Ⅳ b	吊耳B	21.6	丸形湯口	3足	3穴耳	第5図
43	早稲田古墳群 SK118	Ⅳ a	吊耳B	28	不明	3足	3穴耳	第5図
44	川原町口遺跡 KSK04	I b	不明	34	不明	3足		第6図



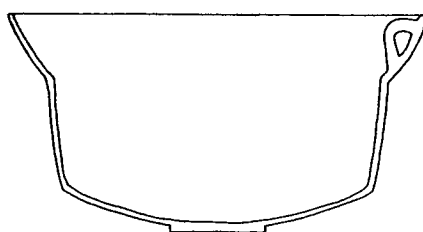
2 根城跡東構地区SK137



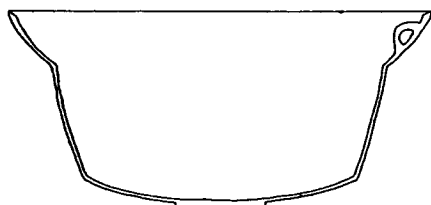
13 大鳥 遺跡RD51墓墳



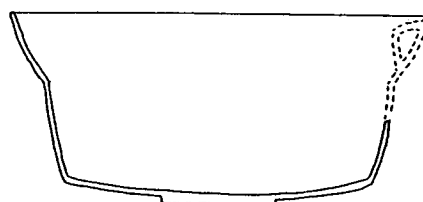
3 沢里



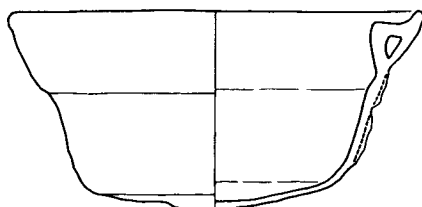
12 山根遺跡墓墳



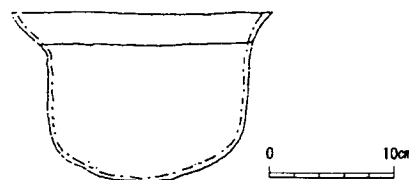
19 浅岸関根



14 金田一月折

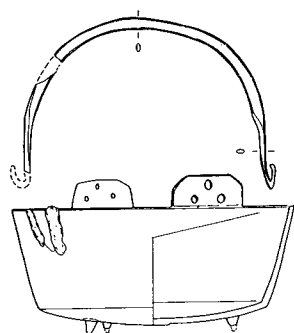


34 仙台内前遺跡5号土坑

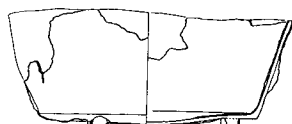


41 神谷作101号墳

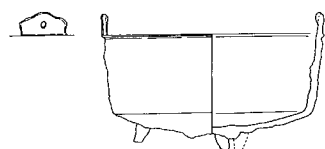
第4図 鍋被り葬に用いられた内耳鉄鍋



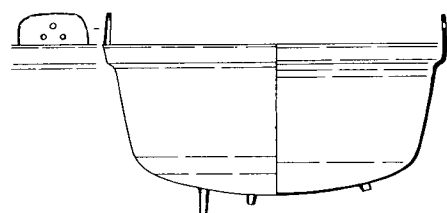
17 関沢口遺跡D - 204墓墳



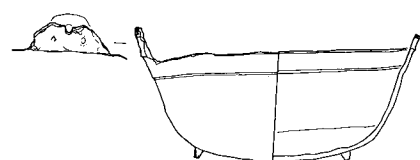
29 渋江遺跡SH856



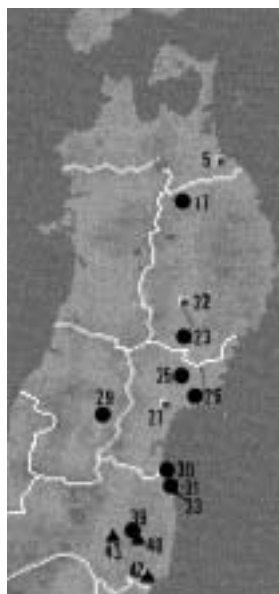
39 本飯豊遺跡1次調査3号土坑



43 早稲田古墳群SK118

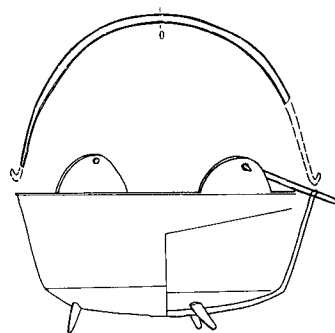


42 松ノ下遺跡第27号墓跡

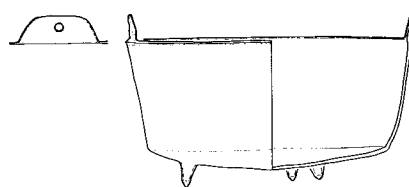


● 吊耳鉄鍋A類

▲ 吊耳鉄鍋B類



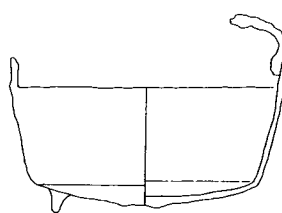
23 柳之御所跡第24次調査SX62



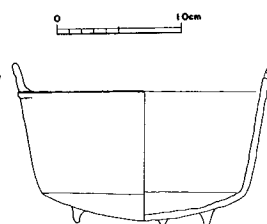
25 下藤沢 遺跡24号墓



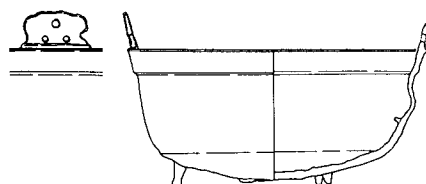
26 群田遺跡5号土墳



31 鳥打沢A遺跡SK104

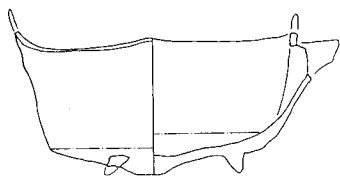


30a 双子遺跡SK13

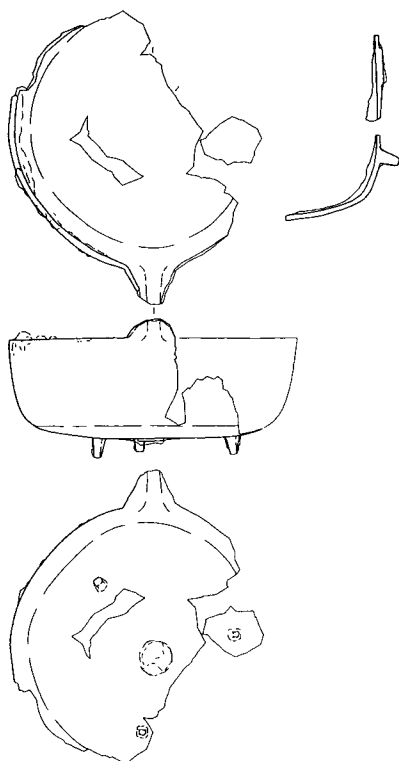


40 鍛冶久保遺跡34号土坑

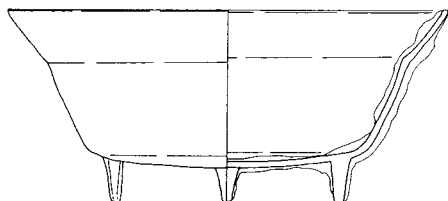
第5図 鍋被り葬に用いられた吊耳鉄鍋



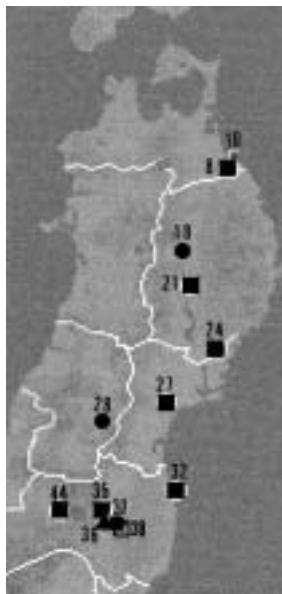
18 大釜館跡遺跡 Gj102土坑 No.1



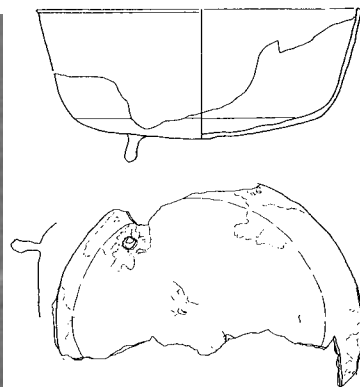
37 郡山館跡 9号土坑



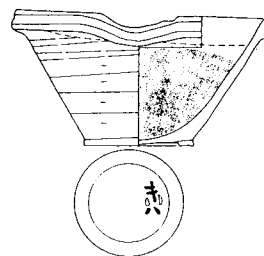
44 川原町口遺跡 KSK04



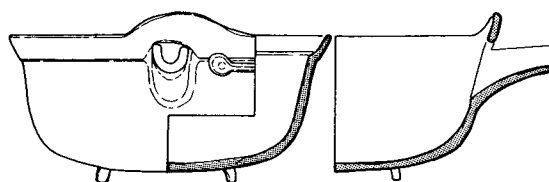
- 片口鉄鍋A類
- ▲ 片口鉄鍋B類
- 形式不明の鉄鍋
- 播鉢



21 上似内遺跡



38 下羽広遺跡 1次調査 4号土坑



36 桜木遺跡近世墓



第6図 鍋被り葬に用いられた片口鉄鍋・不明鉄鍋・播鉢

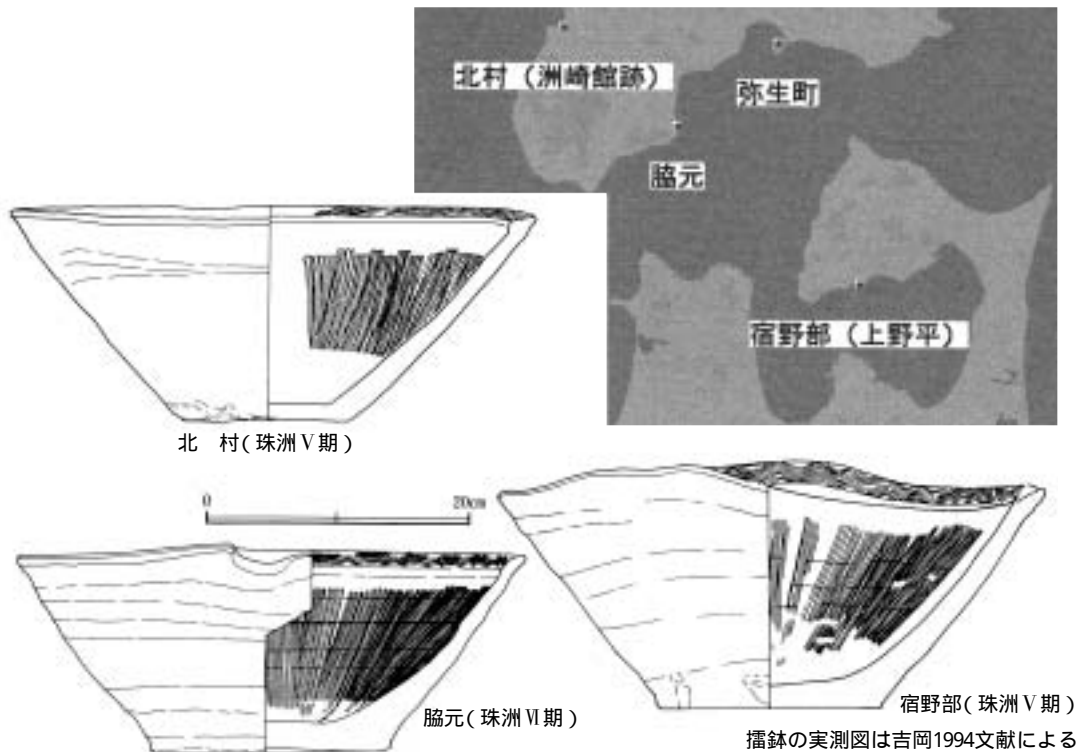
4. 鍋被り葬の意味と系譜

鍋被り葬の本質を理解するためには、時間軸を遡り、あるいは空間軸を広げ、広い視野から、その系譜を考える必要がある。ここでは、中世の播鉢を頭に被せる葬法や鉄鍋を用いた祭祀行為、北海道アイヌの墓に副葬された鉄鍋など、鍋被り葬との関連性が問題となる事象を取り上げる。

中世の播鉢を頭に被せた葬制と祭祀的な鉄鍋の使用例

オホーツク文化における頭部被覆の屈葬が広く知られるように、中世以前にも死者の頭部を器物で覆う葬制自体は存在する^(註3)。そのなかで、年代的あるいは地域的にみて、中世末以降の鍋被り葬に連続する可能性の最も高いケースとしては、北日本で発見されている頭に播鉢を被せた葬制が挙げられよう。

長祿元年(1457)武田信広により築かれたとの伝承のある洲崎館跡に近い北海道松山郡上ノ国町の北村遺跡では、和人的特徴を有する壮年男性の頭に珠洲焼の播鉢を被せた事例が報告されている(百々・松崎1982)。また、陸奥湾に面する青森県下北郡川内町宿野辺の上野平遺跡では、伏した状態の珠洲焼の播鉢の下から和人と考えられる熟年男性の頭骨が発見されている(森本・橋1974)。出土した珠洲焼の播鉢はいずれも珠洲焼編年(吉岡1994)の 期の製品に比定でき、14世紀末～15世紀前半の年代が与えられる(第7図)。類例としては、北海道上磯郡知内町の脇本館跡に近い湧元遺跡(珠洲焼 期播鉢)や、函館市弥生町遺跡(越前焼播鉢)の事例が知られており(松崎ほか



第7図 頭骨に被せられた播鉢(15～16世紀)

1981・吉岡前掲) 津軽海峡周辺域にみられるこの特殊な葬制は、15世紀後半から16世紀代にも引き継がれていた可能性の高いことがわかる。年代の点に関して言えば、珠洲焼、それに続く越前焼を用いた頭骨被覆葬は、16世紀に始まる内耳鉄鍋を用いた鍋被り葬にスムーズに連なりうるのである。問題は、埋葬姿勢と被葬者である。宿野部上野平出土の人骨の分析を行った森本岩太郎は、頭骨に刀創痕がない上、鋭利な刃物をもってしても容易には分離しがたい第一頸椎が発見されなかったことを根拠として、「何らかの理由により頭蓋だけが特別に掘鉢をかぶせて二次埋葬(改葬)された」と推定している(森本・橋前掲)。洲崎北村例では、頭蓋のほかに上位4個の頸椎も発見されており、必ずしも埋葬過程を同一視できないが、ともに和人と考えられる成人男性である点が注目される。

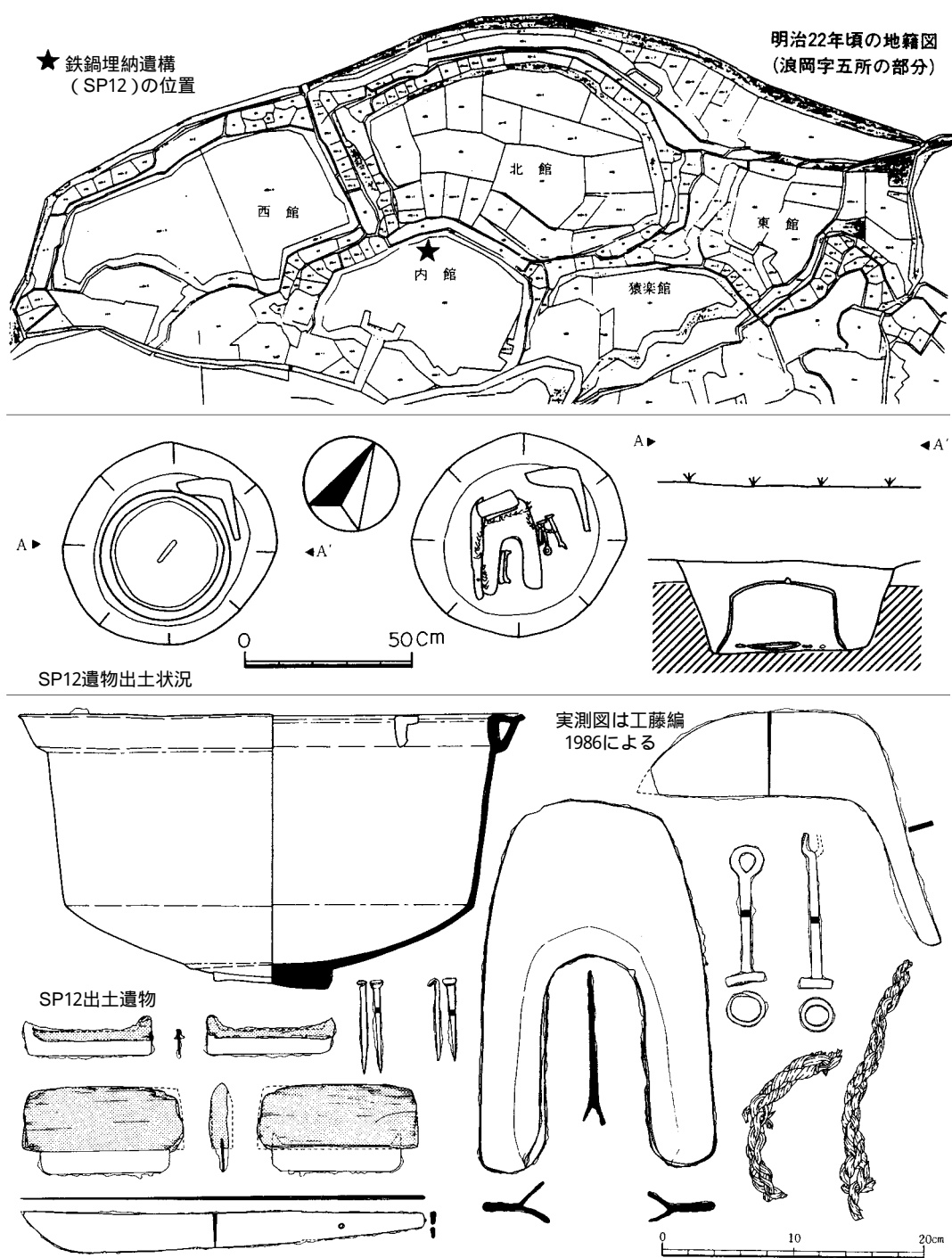
一方、鍋被り葬を鉄鍋という視点から捉えなおした場合、葬送儀礼以外の特別な意図のもとに伏せた鉄鍋を埋めた例が発掘調査事例のなかに見いだされる。

青森県南津軽郡浪岡町の浪岡城跡内館では、円形土坑(SP12)の底面から伏せた状態の内耳鉄鍋1点と鎌1点が検出された(工藤編1986)。鍋の内側からは鍬先1点、釘2点、芋引金2点、轡の引手1対、小刀1点と、それらの鉄製品を結んでいたと考えられる藁縄が出土している(第8図)。SP12の検出地点は、内館のなかでも北西縁辺部にあたり、西館、北館、猿楽館など内館を取り囲む各郭が一望できる場所、いいかえれば浪岡城における「扇の要」ともいえる部分に相当する(工藤清泰氏の御教示による)。民俗学的見地からSP12の性格を検討した三浦貞栄治は、この遺構を「忌み嫌う事変の要因または場所や方角等の悪霊を刃物で抜って穴に埋め、それに鍋を伏せることによって鎮魂せしめる呪術の一つ」と理解し、「それによって病魔や忌避しがたい事変が、生活に影響を及ぼさないように埋め鎮めて生活の安泰を願った」と推定した(三浦1986)。浪岡城跡内館の事例は、鉄鍋の型式と浪岡城跡内館の使われかたから16世紀と考えられる。本例は、鉄鍋による鍋被り葬が始まる時期ないしその直前の段階に、葬送儀礼以外にも鉄鍋を伏せて埋めることによって霊力の働きを期待する行為が存在したことを具体的に示す事例であり、鍋被り葬の本質を示唆するものとして注目される。

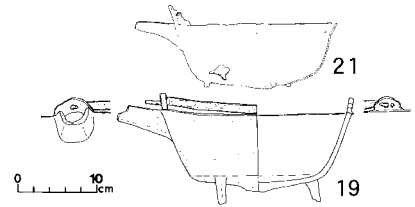
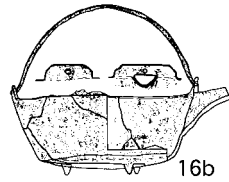
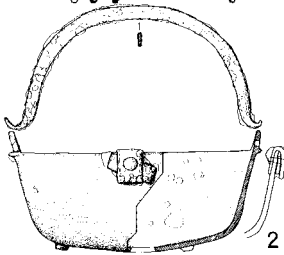
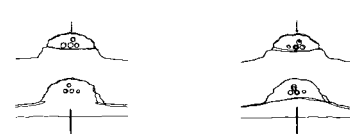
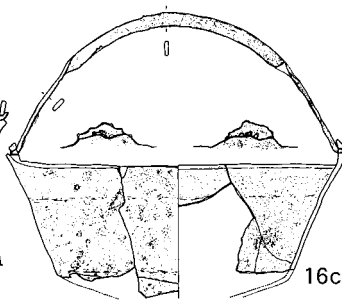
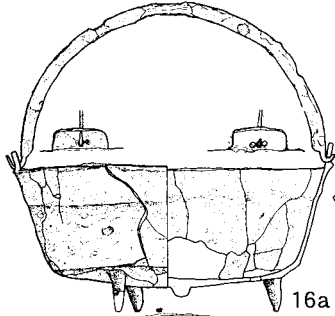
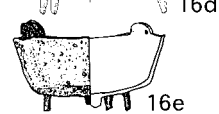
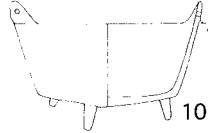
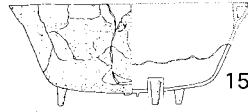
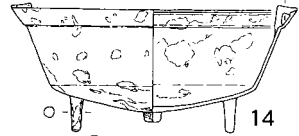
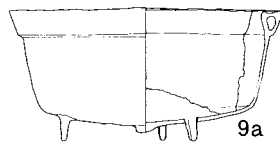
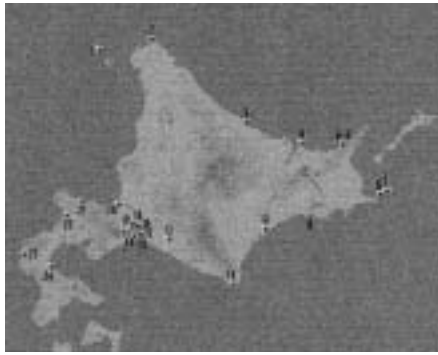
アイヌ墓における鉄鍋

アイヌの女性の墓に鉄鍋が副葬されることは広く知られるところである。古くは、河野常吉が北海道本島のアイヌの古老の語るところを概括し、その副葬品について述べた中で、女の墓の副葬品の一つに鍋が挙げられている(河野1914)。聞き取り調査に基づき北海道アイヌの墓制を論じた久保寺逸彦は、日高沙流アイヌの事例として、女の死者への副葬品の一つに小鍋poi-shuを挙げ、「鍋の様なものは屡々単独で投げ入れたり、墓上に置かれたりする場合も少なくない」と紹介している(久保寺1956)。千歳川流域の近世アイヌ墓の調査事例を検討した田村俊之は、鉄鍋が女性墓に特徴的な副葬品であり、全て遺体の足端部あるいは足部境外から出土すると指摘した(田村1983)。

管見によれば、これまでに発掘調査された北海道の近世～近代墓のうち、鉄鍋が副葬されていた事例は24遺跡39件を数え、アイヌ墓の調査事例が少ない道中央部を除いて、北海道のほぼ全域に分布する(第9図)。39件の事例のなかで、人骨の形質から被葬者の性別が判明した18件は全て女性で

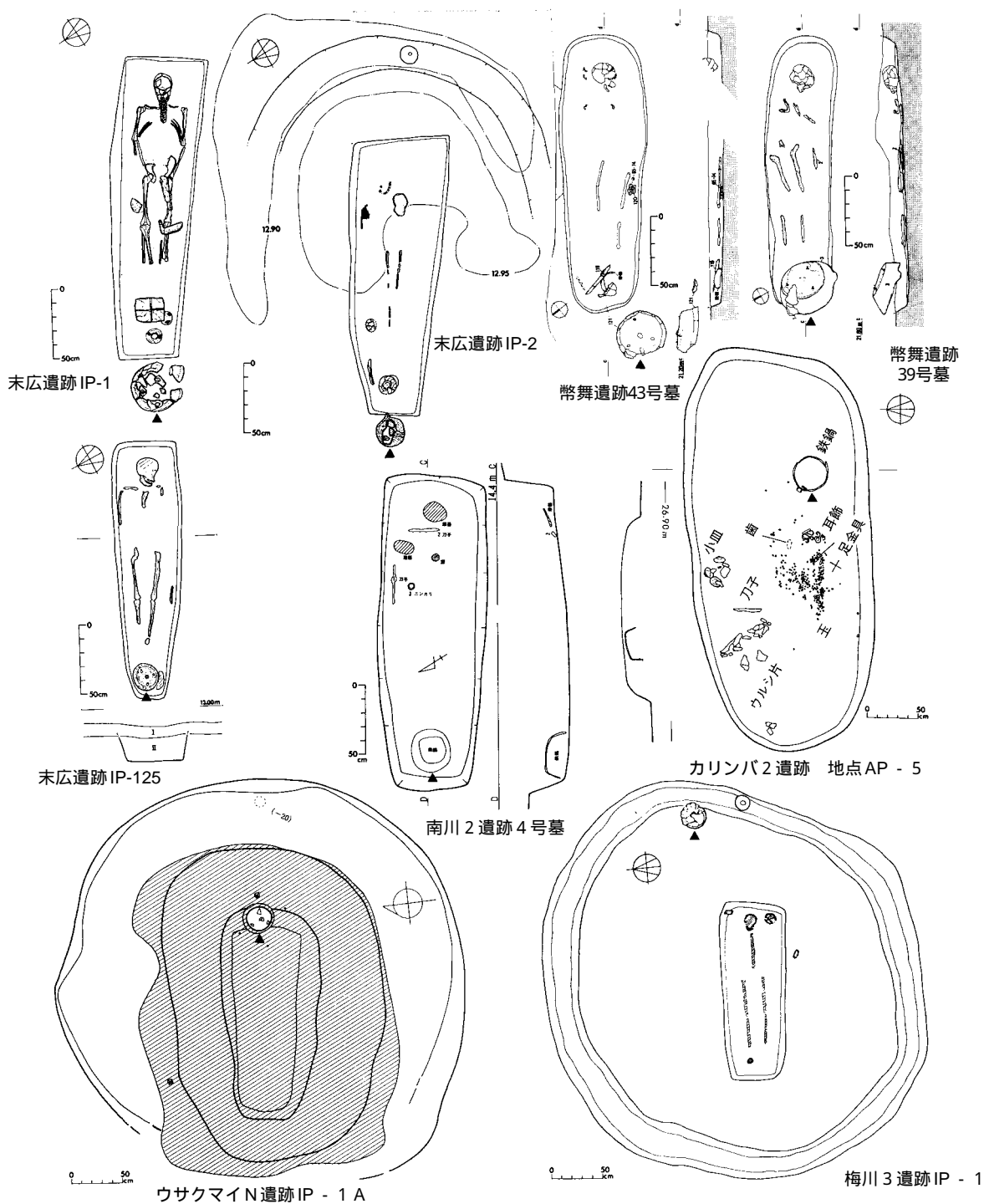


第8図 浪岡城跡内館地区で検出された鉄鍋埋納遺構と出土遺物(16世紀)



No.	遺跡名・墓場名	所在地	年代	性	年齢	鍋の出土状態	鍋の型式	口の形状	脚	備考	文献
1	香深井5遺跡第2号墓場	礼文町香深井村字カフカイ	近世不明	?	?	墓場内下肢側逆位	不明	不明	不明	鍋の底に穿孔	内山ほか1999
2	オンコロマイ貝塚墳墓3	稚内市宗谷村清浜	17世紀後半	女	成人	墓場内下肢側逆位	吊耳A	不明	3足	大塚・大井1973	
3a	旧元紋別墓地1次17号墓	紋別市元紋別11	1884~1948年	?	?	墓場内	不明	不明	不明	箱棺葬	因幡・早坂1998
3b	旧元紋別墓地1次27号墓	紋別市元紋別11	1884~1948年	?	?	墓場内	不明	不明	あり	箱棺葬	因幡・早坂1998
3c	旧元紋別墓地1次28号墓	紋別市元紋別11	1884~1948年	?	?	墓場内(右足もと)	取っ手付	不明	なし	木棺	因幡・早坂1998
3d	旧元紋別墓地1次1号墓	紋別市元紋別11	1884~1948年	?	?	不明	吊耳A	不明	3足?	木棺・墓槽穴	因幡・早坂1998
3e	旧元紋別墓地2次5号墓	紋別市元紋別11	1884~1948年	?	?	不明	吊耳A	不明	3足	骨箱状	因幡・早坂1998
4	網走川口遺跡 モヨロ貝塚 上層	網走市北1条東2丁目	近世不明	女	成人	不明	不明	不明	不明	真水通貫を伴う	米村1950
5a	オンネベツ西側台地遺跡PT13	斜里町遠音別地先	近世不明	女	成人	墓場内下肢側	吊耳A	丸形溝口	3足	成人女性2体合葬	松田1993
5b	オンネベツ西側台地遺跡PT14	斜里町遠音別地先	近世不明	女	成人	墓場内下肢側	吊耳A	不明	3足	再埋葬?	松田1993
6	オシマツ川遺跡	斜里町真壁	近世不明	女	成人	墓場内下肢側逆位	吊耳A	不明	3足		松田1995
7	コタンケン集石墓	根室市牧の内105-1	17世紀初頭以前	女	成人	集石の端に散在	内耳	丸形溝口	3足	開元通貫・北米銭・明銭に伴う	川上1994
8a	温根沼第2遺跡第二号墓	根室市温根沼市街地	1856年以前	?	?	墓場内頭部側不明	不明	不明	不明	安政3年7月降下火山灰の下	児玉・大塚1956
8b	温根沼第四遺跡第三号墓	根室市和田橋茂茂	1883~1886年	女	老年	不明	不明	不明	不明	箱棺葬	児玉・大塚1956
9a	網走市常盤遺跡第43号墓	網走市常盤町4	17世紀初頭以前	女	20~30歳	下肢側墓場外逆位	内耳	丸形溝口	3足	内耳鉄線1	石川1994
9b	網走市常盤遺跡第39号墓	網走市常盤町4	近世不明	女	30歳前後	下肢側墓場端逆位	吊耳A	丸形溝口	3足		石川1994
10	十勝太月遺跡土坑109	浦幌町下浦幌	1667年以降	女	青年	不明	吊耳A	不明	3足	Tabの上のMe-aを切る	石橋ほか1975
11	新浜遺跡12号墓	久毛町新浜	明治中期~戦前	女	成人	墓場内下肢側不明	不明	不明	不明	高橋ほか1973	
12	イニルカシ遺跡2号墓	平取町二風合103	1667年以前	女	40歳前後	墓場外逆位	不明	不明	不明	Tabの下墓槽穴あり	豊原・新中1989
13	クゴコB遺跡墓場	苫小牧市植田	16~17世紀	?	?	不明	内耳	不明	不明	多田1967	
14	美々8遺跡P-1	千歳市美々1292	1667年以前	?	?	頭部側墓場端逆位	内耳	丸形溝口	3足	Tabの下墓槽穴あり	千葉ほか1984
15	梅川3遺跡P-1	千歳市梅川	1739年以前	?	熟年	頭部側墓場外逆位	内耳	丸形溝口	3足	Taaの下	大谷・田村1982
16a	未広遺跡P-1	千歳市中央	1739年以前	女	成人	下肢側墓場外逆位	吊耳A	丸形溝口	3足	墓場を割けて閉塞	大谷・田村1982
16b	未広遺跡P-2	千歳市中央	1739年以前	?	若年	下肢側墓場外逆位	片口A	不明	3足	大谷・田村1982	
16c	未広遺跡P-3	千歳市中央	1739年以前	女	成人	下肢側墓場外逆位	吊耳A	不明	不明	大谷・田村1982	
16d	未広遺跡P-91	千歳市中央	1739年以前	?	?	下肢側墓場外逆位	吊耳A	不明	3足	Taaの下	大谷・田村1981
16e	未広遺跡P-125	千歳市中央	1739年以前	?	若年~青年	墓場内下肢側逆位	吊耳A	丸形溝口	3足	Taaの下	大谷・田村1982
17	ウサクマN遺跡P-1A	千歳市関越	1739年以前	?	熟年	墓場上面逆位	内耳	丸形溝口	3足	Taaの下	種子ほか2001
18	ユカボシC15遺跡AP-2	千歳市長都	1739年以前	?	?	墓場内不明	内耳	不明	不明	Taaの下	西田・三浦・鈴木1999
19	カリンバ2遺跡第1地点AP-5	恵庭市黄金95	1739年以前	?	?	墓場内頭部側正位	片口A	丸形溝口	3足	Taaの下白磁D群皿と共伴	上原ほか2000
20a	K501遺跡第五号土墳	札幌市北区橋路町上橋時路	1739年以前	?	?	下肢側?墓場端逆位	不明	不明	あり	Taaの下	出越1999
20b	K501遺跡第六号土墳	札幌市北区橋路町上橋時路	1739年以前	?	?	下肢側?墓場外逆位	不明	不明	不明	Taaの下	出越1999
21	入舟遺跡P-18	余市町入舟町	18世紀	?	?	下肢側墓場端逆位	片口B	不明	3足?	Taaの下	岡田・宮1999
22a	東山遺跡昭和32年度第2地点	岩内町東山	近世不明	女	成人	不明	不明	不明	不明	伸展葬木棺	大塚・堀井1958
23a	南川2遺跡第4号墓	瀬棚町南川	1741年以前	?	?	墓場内下肢側不明	不明	不明	不明	田部・田村1985	
23b	南川2遺跡第8号墓	瀬棚町南川	1741年以前	?	?	墓場内下肢側逆位	吊耳	不明	3足	黄白色石灰灰の下	田・田村1985
24a	ユウラップ墓地No.68	八雲町内浦町	近世不明	女	成人	墓場内腰部逆位	不明	不明	不明	児玉ほか1936	
24b	ユウラップ墓地No.110	八雲町内浦町	近世不明	女	成人	墓場内腰部上	不明	不明	不明	児玉ほか1936	
24c	ユウラップ墓地No.117	八雲町内浦町	近世不明	女	成人	肋骨および頭骨の上	不明	不明	不明	児玉ほか1936	

第9図 アイヌ墓に副葬された鉄鍋



第10図 アイヌ墓における鉄鍋の出土位置

被葬者の頭部側を
上に墓壇を配置

あった。被葬者の年齢は若年から老年まで幅広く、特定の年齢に集中することはない。

アイヌ墓における鉄鍋の副葬は、火山灰と墓壇との関係から、樽前b火山灰が降下する寛文7年(1667)以前に遡ることは確実であり、湯口が丸形で3足が付く内耳鉄鍋の年代観(越田1984)から16世紀には既に定着しているとみるべきである。さらに恵庭市カリンバ2遺跡第 地点のAP - 5では片口鉄鍋と口縁が内弯する白磁(森田1982分類のD群)が共伴しており、15世紀代に遡る可能性も充分考えられる。新しいほうでは、明治17年(1884)頃から昭和18年(1943)頃までモベッコタンの人々によって利用された紋別市元紋別墓地の事例などから、近代以降も鉄鍋が女の墓に副葬され続けたことが判る。

アイヌ墓における鉄鍋の出土位置は、既に田村俊之が指摘したように、墓壇内の下肢側ないし下肢側の墓壇外に集中する傾向があるが、墓壇内頭部側や墓壇上面、墓壇外頭部側周溝附近などの例外もみられる(第10図)。いずれの場合でも、ほとんどの鉄鍋はきちんと伏せられている。

以上のようにアイヌ墓に納められた鉄鍋は、聞き取り調査が伝えるとおり、女性墓特有の副葬品であり、本州の鍋被り葬墓とは無関係と考えられた。しかし、考古学的事例を詳細に検討した結果、墓壇内における鍋の位置に関しては、鍋被り葬同様、必ずしも聞き取り調査によって伝わるのと完全に一致するわけではないことが明らかとなった。安易に聞き取り調査の成果を考古学的事象に当てはめることは戒めなければならない。

5. 結 語

考古資料の解釈に民俗事例を用いる場合、通常、新しい時代の事象に照らしてより古い時代の事象を理解することになり、それは、現代に近い時代からより古い時代へ遡っていく発想と言うことが出来る。これまでの鍋被り葬研究の多くはこの考え方に基づいており、近年、桜井準也により提言された鍋被り葬に基づく村落空間論の立脚点もそこにある。一方で、考古資料の意味合いを探る方法としては、同じ時代の異なる文化圏や、問題となる考古資料の分布する地域内で先行する時代に類例を求めるやり方がある。本論では、後者の手法により、鍋被り葬の系譜と本質的な意味合いを論じた。

鍋被り葬は、中世後期に津軽海峡を鉄んだ北日本の和人社会にみられる死者の頭に槌鉢を被せる特異な葬制と、同時期に存在した伏せた鉄鍋を土中に埋める「まじない」が組み合わさることにより成立した可能性が高い。また、その成立の在り方からして、その目的は忌むべき死者の霊を封印することにあると考えられる。おそらくは、払い清める力が期待された鉄鍋を用いることで、通常と異なる「異常な死」が人々に災いを及ぼすのを防ごうとしたものと思われる。「異常な死」にはハンセン病や梅毒といった「特殊な病気」も含まれるが、勿論それらが全てではない。不慮の事故や事件による死者もまた鍋を被せる対象になった可能性がある。鍋を被せる際に問題となるのは、死者の生前の姿ではなく、あくまでその死因であったことは、鍋を被せられる対象が、武士から漆器職人、農民まで幅広く、特定の階層や職業、性別、年齢に結びつかないことからも是認されよう。

本来的には鍋は死者の頭に被せられるべきものであったが、たとえ頭に被せずとも、墓境内に納められる限り、その効力は期待されていたと思われる。改めて言うまでもなく、鍋被り葬が盛行した中世後半から近世において、鉄鍋は生活必需品であり、なおかつ値の張る耐久消費財であった^(註4)。そのことはすなわち、鉄鍋が銭や煙管と違って、いくら墓に納めるからといってもそう簡単には手放せない品であったことを意味する。煙管や「一杯飯」に使われた陶磁器や漆器は、それがいくら高価なものであろうとも基本的には死者個人に属する品であるの対して、鉄鍋は本来、家単位で保管管理すべき品である。その大切な鉄鍋を墓に納めるからには、たとえそれが死者の頭に被せられていなくても、そこに特別な意志が働いていたとみるべきであろう。実際、頭や顔を覆うには必ずしも十分とはいえない大きさの鉄鍋が使われていることから、重要なのは、頭や顔を覆うことではなく、死者と共に鉄鍋を埋める埋葬儀礼であったことが判る。

鍋被り葬は、青森県から南関東・信州まで東日本の広い範囲で確認されるが、その立地を検討した結果、東北中部・北部では墓域内から発見される事例が圧倒的に多く、東北南部では、関東地方同様、墓域内、特殊墓域内、単独墓が混在していることが判明した。本論では、この事象を鍋被り葬そのものに対する意識の違い、言い換えれば鍋を被せられた死者の扱い方の違いと理解した。すなわち、東北北部・中部では、特殊な葬送儀礼を経た以上、鍋被り葬墓もまた他の通常の墓と同様の扱いがなされるのに対して、東北南部や関東地方では、鍋を被せただけでは安心できず、立地に関しても通常の墓と異なる扱いをする傾向があったと考えた。

文献史料や民俗学的知見との総合化が求められ、また実際にそれが可能でもある近世考古学の分野において、本論ではあえて考古学的事実の積み重ねを重視し、鍋被り葬の問題に取り組んだ。それは聞き取り調査に安易に依拠した従来の鍋被り葬研究への批判を出発点としている。考古学的事実を丹念に検討することで、これまで取り上げられる機会の少なかった葬制上の系譜や目的から鍋被り葬の本質が垣間見えたのではなかろうか。

謝 辞：

本稿をまとめるにあたり、次の方々や機関にご教示・ご協力いただいた。末筆ではありますが感謝申し上げます。

藤沼邦彦、橘善光、高橋圭次、工藤清泰、佐々木浩一、山口博之、関豊、堀耕平、長佐古真也、奈良貴史、堀金靖、中山雅弘、羽柴直人、中野裕平、井上雅孝、斉藤仁、中田書矢(敬称略)

【註】

- (1) ハンセン病による骨病変には次のような症状がみられるという(鈴木1998)。
鼻の梨状口下縁と前鼻棘の骨萎縮
上顎骨中央部の萎縮と、歯槽部の後退、切歯群の脱落
硬口蓋表面の炎症性変化(骨の菲薄化、小孔・多孔の形成)
手や足の指骨先端の先鋭化
- (2) 梅毒においてゴム腫による骨格系への病変は、前頭骨、頭頂骨、後頭骨、鼻骨、口蓋骨などの頭蓋各部および大腿骨、脛骨などの下肢の長骨に発生しやすいとされ、特に頭蓋における病変には、次のような特徴がほぼ必ずと言ってよいほど見られるという(鈴木前掲)。
病変の広がりには頭蓋全体におよび、瀰漫性・多発性に出現している。
個々の病変は骨表面のいちじるしい凸凹不整や骨溶解像、星芒状の癥痕や硬化した所見など実に多種多様である。
病変はある程度の新生骨増殖の所見があり、いわば治癒過程を示す部分が存在している。
- (3) 初めて鍋被り葬に正面から取り組んだ桐原健は、中世墓についても検討を行い、その起源が平安時代後半まで遡るのではないかとの見通しを示した(桐原1974)。
- (4) 文書の記載から中世後半の物価の比較を行った小野正敏によれば、爛鍋がひとつ75文(畿内1575年)、おなじく鉄鍋100文(地方)と、鉄鍋の価格は、およそ当時の大工や鍛冶職人などの1日分の手間賃に相当する(小野2000)。また、幕末の元治元年(1864)紋別場所の交易品価格によれば、鉄鍋は最も安い1升炊のものでも500文、五升炊ともなれば1000文近くもする(網走市史編纂委員会1958)。

【引用・参考文献】(発掘調査報告書以外)

- 網走市史編纂委員会編 1958 『網走市史』上巻(歴史時代篇) 網走市
- 阿部 勝則 1997 「軽米町大鳥 遺跡墓壇出土の内耳鉄鍋」『紀要』 61～64頁
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 井上 雅孝 1996 「大釜館遺跡墓壇出土の鉄鍋内埋葬貨幣」 平泉研究会第3回検討会資料
- 井上 雅孝 2002 「大釜館遺跡出土の鍋埋納土壌について」『墓標研究会会報』第6号 7～12頁
- 上田 英吉 1887 「内耳鍋の事に付きて」『東京人類学会報告』3巻22号 75～77頁
- 小笠原謙吉 1929 「中羽場史跡遺物」『史跡名勝天然記念物報告』第9号 岩手県教育委員会 5～8頁
- 音喜多富壽 1954 「内耳鍋を被って埋葬された人骨の一例」『内耳の鍋』12・13頁
- 小野 正敏 2000 「中世の物価と埋納銭」『日本史研究最前線』別冊歴史読本 新人物往来社 102～106頁
- 神田 孝平 1887 「内耳鍋の話」『東京人類学会報告』2巻14号 160～167頁
- 北澤 滋 2001 「三輪野山六神遺跡出土の鍋被り土壇墓について」『墓標研究会会報』第5号 12～14頁
- 桐原 健 1974 「鍋を被せる葬風」『信濃』第26巻第8号 63～70頁 信濃史学会
- 草間 俊一・森本岩太郎 1972 『内耳鉄鍋と人骨』 九戸村教育委員会
- 久保寺逸彦 1956 「北海道アイヌの葬制」『民族学研究』20-312 1～35頁 同20-3・4 54～101頁
- 小井川潤次郎 1954 『内耳の鍋』 八戸市教育委員会
- 河野 常吉 1914 「アイヌの副葬品」『人類学雑誌』29-2 45～47頁 東京人類学会
- 越田賢一郎 1984 「北海道の鉄鍋について」『物質文化』42 14～38頁 物質文化研究会
- 越田賢一郎 1996 「北日本における鉄鍋」『季刊考古学』第57号 61～65頁 雄山閣
- 越田賢一郎 1998 「北国の鉄鍋」『白い国の詩』通巻507号 4～13頁
- 桜井 準也 1992 「近世の鍋被り人骨の出土例とその民俗学的意義」『民族考古』第1号 85～98頁
慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室
- 桜井 準也 1996 「近世鍋被り葬について」『江戸時代の墓と葬制』 江戸遺跡研究会第9回大会発表要旨
93～112頁
- 桜井 準也 2001 「近世の鍋被り葬と村境」『民族考古』第5号 31～50頁
慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室

- 桜井 準也・杉田 陽子 2001 「鍋被り葬研究の現状と課題」『墓標研究会会報』第5号 1～6頁
- 桜井 準也 2002 「鍋被り葬研究の意義」『日本考古学協会第68回総会研究発表要旨』 137～140頁
- 司東 真雄 1981 『奥羽古キリシタン探訪 - 後藤壽庵の軌跡 - 』 八重岳書房
- 司東 真雄 1984 『岩手のキリシタン』 岩手出版
- 鈴木 恵治 1981 「陣笠状の内耳鉄鍋」『紀要』 70～72頁 岩手県埋蔵文化財センター
- 鈴木 隆雄 1998 『骨からみた日本人』 講談社選書メチエ142
- 関根 達人 1998 「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報』10 51～90頁
東北大学埋蔵文化財調査研究センター
- 関根 達人 1999 「東北地方における近世食膳具の構成」『東北文化研究室紀要』第40集 33～56頁
- 田中 藤司 2002 「江戸近郊農村の墓標建立」『江戸の祈り』 江戸遺跡研究会第15回大会発表要旨
137～156頁
- 田村 俊之 1983 「北海道における近世の墓制」『北海道考古学』第19輯 51～58頁
- 千葉 豊・阪口英毅 2001 「京都大学本部構内遺跡出土の中世鉄鍋」『墓標研究会会報』第5号 9～11頁
- 寺島 孝一 2002 「『誹風柳多留』にみる江戸のくらし」『江戸遺跡研究会会報』No.87 1～16頁
- 東北中世考古学会編 1999 『東北地方の中世出土貨幣』 第5回研究集会資料集
- 百々 幸雄・松崎水穂 1982 「北海道洲崎館発見の中世頭骨」『人類学雑誌』第90巻1号 73～78頁
- 長佐古真也 2001 a 「『鍋被り葬研究の現状と課題』発表によせて」『墓標研究会会報』第5号 7・8頁
- 長佐古真也 2001 b 「江戸近郊村落墓制の多面性」『考古学ジャーナル』477 14～17頁
- 羽柴 直人 1996 「岩手県の中世鉄鍋2例」『岩手考古学』第8号 119～123頁
- 羽柴 直人 2002 「岩手県における近世の鍋被り葬墓」『墓標研究会会報』第6号 13～21頁
- 馬場 脩 1939 「日本北方地域及び附近外地出土の内耳土鍋に就て」『人類学・先史学講座』第14巻
1～103頁 雄山閣
- 松崎水穂ほか 1981 「北海道洲崎発見の中世遺物と頭骨」『考古学雑誌』第67巻2号 84～95頁
- 三浦貞栄治 1986 「浪岡城跡内館出土の伏せ鉄鍋について」『浪岡城跡』 131～137頁
浪岡町教育委員会
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2 47～54頁 日本貿易陶磁研究会
- 森本岩太郎・橘膳光 1974 「下北半島西通発見の人骨と陶器」『北奥古代文化』第6号
- 森本岩太郎 1996 「八戸市沢里出土の内耳鉄鍋を被った古人骨」『研究紀要』第11号 14～18頁
八戸市博物館
- 吉岡 康暢 1989 『日本海域の土器・陶磁(中世編)』人類史叢書10 六興出版
- 吉岡 康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

【引用・参考文献】(発掘調査報告書)

- 阿部 勝則・高橋與右衛門 1999 『大鳥 遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第290集
- 阿部 正光 1988 『下藤沢 遺跡』 瀬峰町文化財調査報告書第6集
- 飯村 均・佐藤 啓ほか 1993 『東北横断自動車道調査報告』24 福島県文化財調査報告書第295集
- 遠藤弥三郎ほか 1993 『東北横断自動車道遺跡調査報告』23 福島県文化財調査報告書第294集
- 大河 峯夫ほか 1982 『母畑地区遺跡発掘調査報告』 福島県文化財調査報告書第107集
- 大竹 篤ほか 1990 「師山遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告書』 福島県文化財調査報告書第234集
- 押切 智紀ほか 2002 『渋江遺跡第4次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第106集
- 角田 克人 1989 『水無遺跡』 安子島地区土地改良関連発掘調査報告書2
- 工藤清泰編 1986 『浪岡城跡』 浪岡町教育委員会
- 工藤 竹久・佐々木浩一ほか 1983 『史跡根城跡発掘調査報告書』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第11集
- 斉藤 吉弘 1981 「日光山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』 宮城県文化財調査報告書第81集
- 鈴木 雄三ほか 1983 「桜木遺跡」『河内下郷遺跡群』 郡山市教育委員会

高橋 圭次 2002 『河股城跡発掘調査報告書』 川俣町文化財調査報告書第19集
 高山 博・奈良 貴史 1989 「小峯山遺跡出土人骨」 『小峯山遺跡』 55～66頁 佐野市教育委員会
 武田 耕平・鈴木 功 1998 『仙台内前遺跡』 福島市埋蔵文化財報告書第25集
 武田 正俊・高田 勝 1998 『郡山館跡第1次遺構確認調査報告』 郡山市教育委員会
 玉川 英喜 1986 『関沢口遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第95集
 溜浩 二郎・吉田真由美 2002 『上似内遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
 第379集
 中野 裕平 1993 『群田遺跡』 河南町文化財調査報告書第8集
 中村 明央・高田 和徳 1999 『姉帯城跡』 一戸町文化財調査報告書第41集
 中山 雅弘ほか 2001 『松ノ下遺跡』 いわき市埋蔵文化財調査報告第73冊
 福森 久晃・高井 剛 1996 「下羽広遺跡(第1次)」 『郡山東部』 20 郡山市教育委員会
 堀金 靖 1994 『川原町口遺跡』 会津若松市文化財調査報告書第36号
 本澤 慎輔 1990 『柳之御所跡発掘調査報告書』 岩手県平泉町文化財調査報告書第19集
 堀耕平ほか 1997 『市内遺跡発掘調査報告書』 2 原町市埋蔵文化財調査報告書第15集
 堀耕平ほか 2001 『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書』 原町市文化財調査報告書第26集
 安田 稔・山崎喜保ほか 1994 「鳥打沢A遺跡」 『原町火力発電所関連遺跡調査報告』 福島県文化財調
 査報告書第298集